

「天安門事件」

2019年06月13日

中国の「天安門事件」が起って、今年は30年になる。ジャーナリズムは特集を組んで様々な報道をしている。1989年6月4日、広い天安門広場を、民主主義と自由を求める学生、若者たちが埋め尽くした。その若者たちに対し軍隊を出動させ、暴力で排除し、多くの犠牲者が出た。中国当局は学生たちの暴動を正規に鎮圧したと言い、犠牲者は319人であると発表している。しかし、数千人、あるいは1万人を超す人々が虐殺されていたという報道もある。テレビで放映された軍隊の発砲に逃げまどう若者たちの光景に、同国民に対して、こんな残虐なことができるものかと目を奪われた。傷ついた仲間をリヤカーで運ぶ映像、そして、戦車の前に立ちはだかつて阻止しようとする青年の姿は記憶に生々しい。

「東京新聞」の「本音のコラム」に鎌田慧氏が「天安門事件30年」を寄稿し、及川淳子氏の『11通の手紙』を紹介していた。中国民主化運動のリーダーとして活躍し、ノーベル平和賞を受賞した劉曉波、霞夫妻の友人であり、劉曉波研究の第一人者である及川氏が、『11通の手紙』で、天安門広場に集まった若者たちの想いを美しく、静かに語った劉曉波の魂の叫び、自由を求める切々たる言葉を、創作的書簡集として著わしている。

「あの日」、同じ天安門広場にいた学生に宛てて、ヴォルテールの「私はあなたの意見に反対だ。だが、あなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」という言葉を書き送っている。あるキリスト者に宛てた手紙には、「君が、君の神様を信じる『自由』を、僕は大切にしたいと思う。だから、僕が神様を信じない『自由』を、君も大切にしてくれないか」と書いている。相手の言葉や信条をどこまでも守り抜くことが、言葉の自由を確保することである。愛する霞夫人に宛てた手紙には、「いつだって、僕らのアパートは見張られていたから、『自由』は程遠い」という言葉が、夫妻の日常であったことを伝えている。劉曉波は民主化を求める活動を続け、当局から逮捕拘禁された。2010年にノーベル平和賞を受賞したが、中国から出国することが認められず、授賞式は空の椅子が壇上に上げられただけであった。彼の最期は、末期の肝臓がんが冒され、事実上の獄死であった。

戦車の前に立ちはだかつて、一步も引かなかった青年は処刑されたとも、天津の刑務所で名前も罪状も明らかにされずに、幽閉されているとも伝えられている。真実は分からない。中国当局は明らかにするどころか、全てをもみ消そうと触れることさえ厳禁する姿勢を貫いている。中国の「報道自由度ランキング」は180ヶ国中、177位である。民主化と自由を押し潰す中国は世界のリーダーになろうとして、米国との覇権争いに躍起になっているようである。米国のトランプ大統領は、自分と意見の違うことを「フェイクニュース」と言って、切り捨てている。対話によって真実を追求しようとする機運は閉ざされ、徒な対立を生むだけである。このような米国と中国が覇権争いをしているのだから、世界の未来を暗いと言わざるを得ない。

天安門30年の報道を見ながら、1980年に起きた韓国の「光州事件」を思い出した。全斗煥の軍事クーデターに反発した学生たちが抗議デモを起こした。これに対し軍が出動し、同じ国民同士が争い、多大な犠牲者を出した。韓国は「光州事件」を検証し、犠牲者への慰霊も行い、先ごろ、文在寅大統領は政府として、国民に謝罪を表明した。

報道の自由は、中国や韓国の問題だけではない。日本も自由が著しく狭められていると外国のジャーナリストからも指摘されている。権力の横暴を食い止め、事実を明らかにするジャーナリズムを育てることが国民の義務であり、責任である。